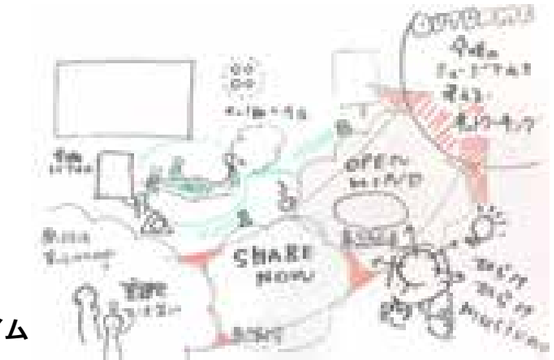
# ミュージアムの課題と可能性を考えるワークショップ
# 第１回
# ミュージアムに関わるひとと活動

レポート

| | | |
|---|---|---|
| 実　施　日 | ｜ | **2018 年 12 月 16 日（日）13：30～17：00** |
| 会　　場 | ｜ | **京都芸術センター**（ご協力：京都文化芸術コア・ネットワーク） |
| 参　加　者 | ｜ | **京都地域のミュージアム関係者 10 名、スタッフ７名** |
| ファシリテーター | ｜ | **村　田　　麻里子**　（関西大学 社会学部 社会学科 メディア専攻 教授） |
| グラフィッカー | ｜ | **肥　後　　祐　亮**　（NPO 法人グローカル人材開発センター） |
| 主　　催 | ｜ | **ICOM 京都大会準備室** |




**<当日の流れ>**

13:30-13:50　**あいさつ・趣旨説明、自己紹介タイム**

13:50-14:20　**ワーク①　まずは共有しませんか？あなたのミュージアムで気になっていること**
日ごろミュージアムの現場で抱えている悩みや問題、関心事を、同じミュージアムで働くもの同士で打ち明け合って、課題を掘り起こします。

14:20-14:35　**ワーク①　共有タイム**（グループごとに披露）

15:35-15:50　休 憩

15:50-16:50　**ワーク②　ミュージアムに関わるひとと活動：新たなコミュニケーションをデザインする**
グループで、引き当てた【人物カード】×【活動カード】の組み合わせをもとに、ミューアムに新たなコミュニケーションを生み出す企画をデザインします。

15:50-16:50　**ワーク②　共有タイム**（グループごとに披露）と**全体ふりかえり**

16:50-17:00　**まとめ**

グラフィック：肥後祐亮（以下すべて）

## ＜ワークショップの記録＞

### ワーク① まずは共有しませんか？あなたのミュージアムで気になっていること

事前に参加者の皆さんに「日頃気になっていること、興味を持っていること」についてアンケートを取り、同じ関心事を持つ人達どうしでグループになって、その事柄について語り合ってもらいました。

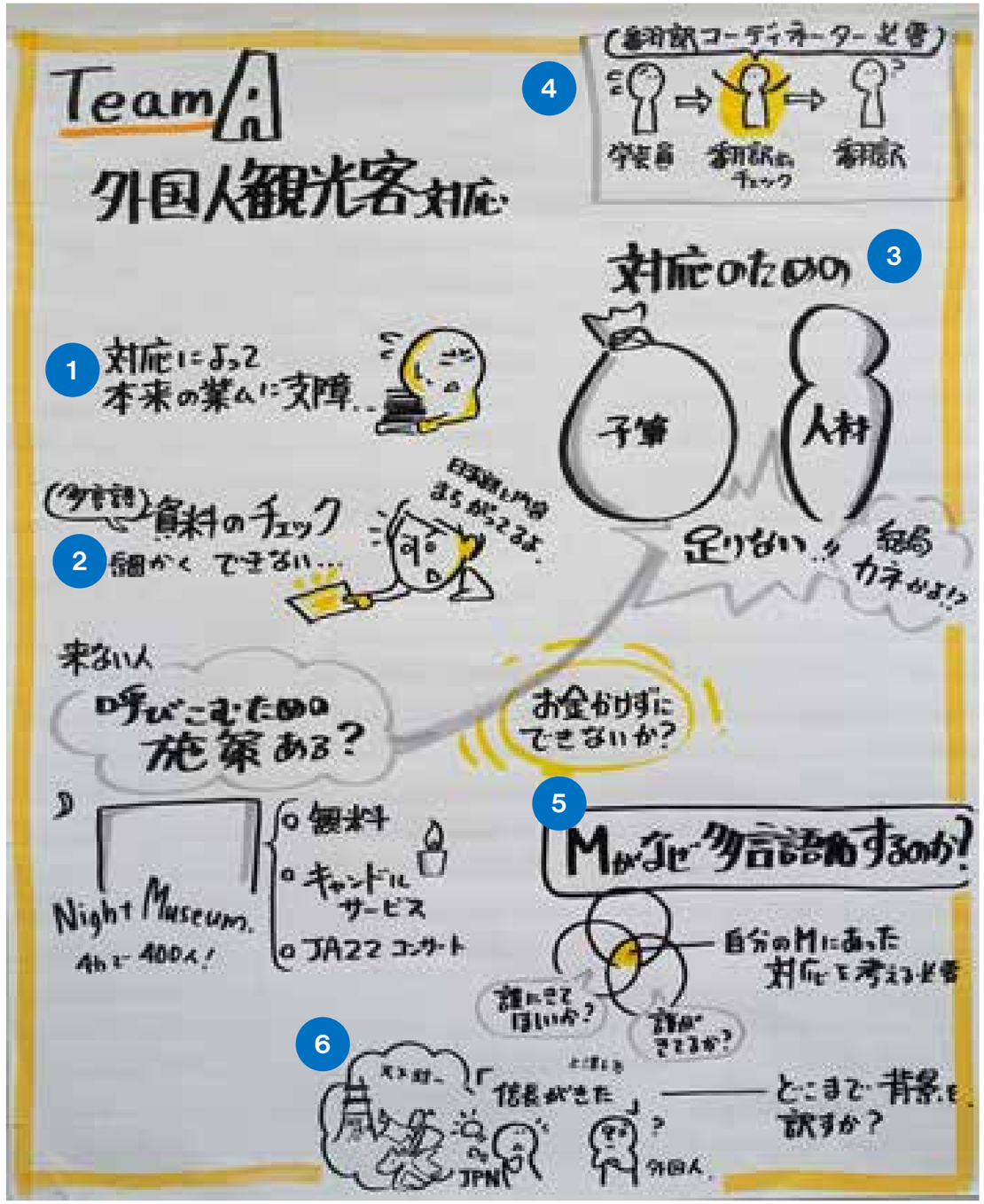
アンケート「日頃気になっていること、興味を持っていること」（　）内は回答数

■外国人観光客への対応（４）　■広報（２）　■指定管理者制度（２）　■資料の保存・活用（８）
■障害者対応（２）　■常設展示（５）　■他団体との連携（７）　■地元とのつながり（５）
■ミュージアムの組織や人間関係（１）　■リニューアル（１）　■教育普及活動（１）

### チーム A：「外国人観光客対応」

❶～：右グラフィックレコーディングの番号に対応　▶：意見・感想

❶外国人の対応をすることで、本来の業務に支障をきたしてしまっている（他にも仕事が沢山ある）。
❷学芸員が分からない言語は、チェックができない（来館者に指摘されることも）。
❸言語対応するための予算と人材がない（ボランティアという方法もあるが、特に英語以外の言語は地方都市では無理）。お金が足りない。
→（お金をかけずに）来ない人たちを呼び込むための方法は？　例えば、舞鶴引揚記念館：ナイトミュージアムを開催。「無料、キャンドルサービス、ジャズコンサート」で入館多数に。
❹国立博物館・美術館は国の方針として多言語化（日・英・中・韓）を推進。
－国立博物館：英・中・韓国語の担当がいる。日本語をそのまま直訳するのではなく、書かれていることの背景や読み手の状況を考慮し、かみ砕いて再創作する。
－国立美術館：通訳会社・翻訳者とのやりとり、回を重ねるなかでだんだんスムーズに、精度も上がる。一方で、学芸員が分からない言語は、チェックができない。細かいやりとりが、予算の関係で厳しい。
▶語学と専門的な知識が分かる人が、学芸員と翻訳者の間を橋渡し・仲介する「コーディネーター」的な役割を果たす人が必要なのではないか。
－海外ではインタープリテーション部門が、教育担当スタッフが学芸員の文章をチェックし、（来館者に）解かりやすい表現に変える。翻訳も同様に、（原文が）読み手が理解できる文章か検証する必要がある。
❺ミュージアムが多言語化対応するのはなぜか？ということを考える必要がある。
自分のミュージアムの特質をふまえて、どういうお客さんが来ているのか、また来てもらいたいのか、を見極め、それに合った言語対応を考えることが重要。４ヵ国語を全部やればいいわけではない
▶ミュージアムによって、ターゲットや訪れる外国人の国籍や属性も違う（同じ京都でも…舞鶴引揚記念館：ロシア、台湾、京都文化博物館：中国、京都国際マンガミュージアム：フランス）
❻日本語の解説文は、固有名詞が多く（日本の歴史・文化の）基礎知識があることを前提に書かれている。外国語の解説は、知識ゼロの人が読んでいることを前提にするべき。
▶例えば、「信長が上洛した」という解説文からは、日本人だと、「天下統一」や「もうすぐ本能寺の変で死んでしまう」というストーリーまで思い浮かぶが、歴史的背景を知らない外国人にとっては、（そのまま訳してしまうと）「信長が京都に来た」ということしか分からない。「背景をどこまで訳すか」ということを考えたほうが良い。
▶外国語対応も、誰に来てほしい、誰が対象なのかを考えるなど、ミュージアム側が自分たちの館の方針を持って対応することが大切。



## チーム B：「資料の保存活用・展示」

❶～：右グラフィックレコーディングの番号に対応　▶：意見・感想

❶資料の「保存・収集」方針の話から、ミュージアムという場での資料の立ち位置の話に。
－手塚治虫の「マンガ原画」がフランスで３千５百万円落札される→元々はローカルで嗜好していたものを、ハイカルチャーに引き上げてきて需要するありかたって、どうなんだろうか？
－「春画」も同じで、枕絵で秘めて見ていたものが、今は美術館で鑑賞されている。
－これこそが、ミュージアムという近代化した場が持つ、良い所でもあり悪い所でもあるのではないか。
❷それでは、ミュージアムで「展示」するって一体どういうこと？という展開に。
ミュージアムは自らが持つ「理念」をもとに、収集も展示も積み上げてきているが、
❸－ミュージアムが持つ「理念」をミュージアム側がどこまで強固に保持するか、提供する側としてどのようにふるまうか。
　－（展示を観た）来館者が持つ意見と（博物館側の感覚との）ズレを、博物館側はどう取り入れるか、どこまで反映させるか、（博物館側が持っている）理念を柔軟に変えていくのかどうか。
❹マンガミュージアムは理念がわりと緩やかだが、他の博物館はどうか？
平和ミュージアムの「８月６日」という展示[*1]：展示をみて何を考えるか、他者とどう共有するか－来館者がタブレットに感じたことを書きこみ、スクリーンでそれを展示するアウトプット展示を行なった。
→現代資料を解き明かしていくことと、館の理念（方針）とがどこまで合致しているのか、ジレンマ。
－「展示」という資料が社会化される場で、どういう語りを展開するか、ミュージアムの責任でもある。

---

▶博物館が展示でどこまで語るか、どこまで語れるかは、オーディエンスのリテラシーとも関わってくる。こちらが発信した展示を、来館者がどこまでどのように読み込んでいるのかは、把握が難しい
▶当初の理念があってそこから出発するとしても、集めた資料がそれを覆すことはあり得るのでは。
展示物をみて先入観が裏切られる－それが資料をみる楽しみ、資料が物語るというのはそういうこと。
▶ミュージアム側の価値判断、どこまで出すか？
－平和ミュージアム：教育機関という立ち位置。歴史を正しく認識し、歴史観を共有することでアジアの和解につなげる「（戦争の）警鐘」ではなく「共有」。
－マンガと戦争展（マンガミュージアム）[*2]：70 年代以降の平和教育の影響前の 60 年代の戦争マンガの多様性を示した展示→右翼的である、加害者であることを隠そうとしているという反応・感想。
▶出てきた資料に誠実に向き合うことが大切。ともすれば（学芸員が）資料に自分の思想や意見をのっけてしまう怖さもある。その危険を自覚することが必要。
▶マンガミュージアムの場合は、マンガの社会的位置づけがはっきりしていない分、来館者と対等な位置にあるが、近代からある分野の博物館・美術館は、来館者とフラットになりにくい？
▶❺「本（書物）」は、（メディアとして）読み手がどう読んで解釈しても OK なのに、「ミュージアム」や「展示」となると違う現状がある。まだ　“メディアとして認識されていない”。

参考：*1「８月６日」展 http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/event/special/2018/exhibition2018_3.html
　　*2「マンガと戦争」展 http://www.kyotomm.jp/HP2016_php/event/exh/manga_and_war.php

## チームＣ：「地域とのつながり」

❶～：右グラフィックレコーディングの番号に対応　▶：意見・感想

❶これまでミュージアムを支えていた地域の人たちの高齢化により、ミュージアムの土台が弱くなってきている現状がある。

❷そこで支え手を増やすために、学校との新しいつながりー「学校」が所蔵する資料・「学校」に所在する資料を博物館や学芸員が扱っていくこと・活用すること[*1]、が提案できるのではないか（これまでの学校の博物館訪問や、学校への出前出張とは違う「学校」と「博物館」の関係が展開できるのでは）。

❸学校資料のなかには、所有が曖昧なものが多く、管理できていないために、忘れられたり、放置されているモノがあるが、これらに「ミュージアム」が介在することで、調査→資料化し、展示など表に出し活用していくことが出来るようになる。

❹資料として活用するためには例えば、京都府立の盲学校・聾学校にある（両校の前身である）「京都盲唖院」の明治期以来の教材や文書等の資料を調査し、３,000 点が国の重要文化財に指定される[*2]というような、具体的な行動を起こしてアーカイブ化することが大切。

❺資料化・アーカイブ化（ドキュメンテーション）に関しては、ミュージアム自身もなかなか管理が追いついていない（例えば、美術館と関わりのある作家団体さんの資料のデータ化や、博物館の昔の総務文書や守衛日誌の資料化など、価値があると分かっていても、人手不足や日々の他の業務が忙しく、後回しにならざるを得ないなど）。

❻そういったなかで失われていく資料もあるので、今後どうしていくかということを、みんなで一緒に考えていきましょう。

---

▶地元とのつながり・連携というと、ワークショップなどの交流や、来館者サービスという話になりがちだが、資料のアーカイブや活用という本質的な関わりー資料を経由して細く・長く地域と関わっていくという視点が面白い。

▶（地域とのつながりを持つために一過性のイベントを行なうのではなく）自分達学芸員がやっていることの延長や、普段の仕事を拡張させる、ある資源を昇華させるという（方向性の）方が良いのかも。

▶❼そろそろ結びついてカタチになったという幸せな（成功）事例が出てくるといいのだけれど、それは何かあるか？

- 地域とのつながりが増えると、「資料」は増えていっているので、今後はそれを地域に還元していく。
- 博物館とつながることで何か出来たと（地域の人たちに）思ってもらえることが重要。学校資料で関わった先生が「自分たちの（学校の）資料を使って授業をやってみたくなった」と言ってくれた。
- 山城郷土資料館の「発掘された文字資料」の企画展では、考古資料だけでなく「京都盲唖院」の「点字資料」も「文字資料」として展示し、来館者に重要な資料の存在を知ってもらうきっかけに。

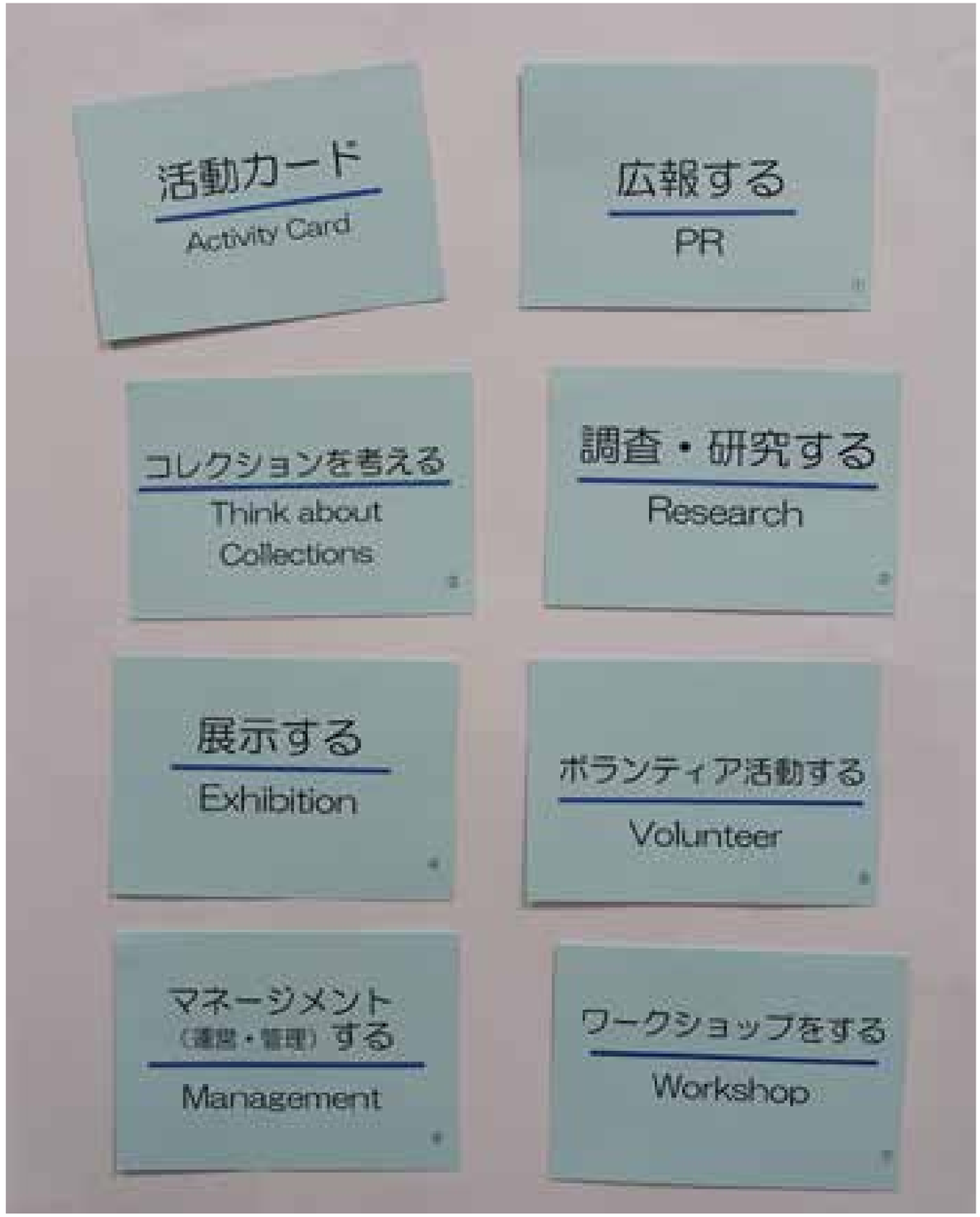
参考：*1 学校資料の活用 http://kyo-gakurehaku.jp/exhibition/H30/301215/img/symposium.pdf

*2 京都盲唖院関係資料 https://www.kyoto-np.co.jp/sightseeing/article/20180314000001

**ワーク② ミュージアムに関わるひとと活動：新たなコミュニケーションをデザインする**

各チームに、ミュージアムに関わる人たちの属性を示した「人物カード」（下記８種）と、ミュージアムでの活動を記した「活動カード」（下記７種）を用意し、それぞれ１枚ずつ引き当ててもらい、引き当てた「人物カード」と「活動カード」を組み合わせたプロジェクトを考えてもらいました。

※「人物カード」は、普段あまりミュージアムに関わらない人たちも選択肢に入れた。「活動カード」は、ミュージアムの基本となる活動を挙げた。新たな視点を開拓するために、参加者には、カードの内容は見えない状態で裏面にして選んでもらいました。



## チーム A：「東京から転勤してきた青山さん一家」×「マネージメントする」

❶～：右グラフィックレコーディングの番号に対応　▶：意見・感想

❶青山さん一家は東京から来てホームシックにかかっている設定にして、その青山さんにミュージアムは何ができるのか、ミュージアムを介して青山さんを京都にマッチングさせることを、マネージメントとして考えた。

❷地域住民（元々住んでいる人たち）と新住民（青山さん一家）がいかに結びあえるのか、両者を繋ぐしかけとして、一家（家族）なので子どもがいると想定し、京都特有の「地蔵盆」*1を使って地域の文化を伝える働きがミュージアムにできるのではないか。

❸地域のイベントなど地元コミュニティに参加してもらいたい場合、（新住民の）彼らがどうしたら地域の情報にたどりつけるか、そこに「情報のハブ・拠点」としてミュージアムが関われるのでは。

❹しかし、ミュージアムのなかに置いているチラシや情報は、何でもかんでも置いて OK という訳ではなく、意識的あるいは無意識的に規制されている状態。

❺ミュージアムの枠・タガを外し、広い情報の拠点として機能してもいいんじゃないか。

－地域の情報が手に入る「場」を（ミュージアムが）作り出す。例えば、「ママフェス」とか。

－京都市美術館：リニューアル工事中の特別な姿をみてもらう*2（「市民しんぶん」等で広報）

❻VR 地蔵盆：アーティストが関わり、彼らならではの視点で VR を用いてゲーム感覚で数珠まわしをする新しい地蔵盆の事例→これまで来なかったひとたちが参加しやすくなる効果。

---

▶❷「地蔵盆」という素材：

－子どもが介在する…家族が入っていきやすい、地域に入るきっかけにしやすい。

－念仏を唱えながら同じ行為（数珠回し）をする…共同体の確認作業でもあり、「入ってくる人」「迎える人」が一体になりやすい。

▶❷地場のモノを使って新しい人を巻き込む接着材としてミュージアムが機能する。高齢化によって、地域の文化の継承が危ぶまれるなか、地域のお祭りのコーディネーションにミュージアムが関わることが出来るのではないか。

▶❹ミュージアム自身が、入れている情報を取捨選択してしまっている（国公立館の場合、「政教分離」の原則による制限 etc.）。ミュージアム自身が縛られているタガをどう外すか、外しかたが重要。

参考：*1 地蔵盆とは、8 月 23,24 日に行われる地蔵をまつる行事のこと。京都を中心とする近畿地方にみられる、子どもが主役の自治会ごとに行われる祭事。行事のうちに「数珠回し（じゅずまわし）」があり、輪になって座りひとつの大きな数珠を皆で膝の上に取り、お経の念仏に合わせて横へ横へと回していき、無病息災を願う。

*2 京都市美工事現場の見学 http://www2.city.kyoto.lg.jp/bunshi/kmma/images/300915ICOMkohoshiryo.pdf

## チーム B：「近所に住む吉田さん」×「調査・研究する」

※チーム C→B の順で発表（先にチーム C の記述参照）❶～：右グラフィックレコーディングの番号に対応　▶：意見・感想

❶近所の〇〇さん：誰でもない、近所に住んでいる人（特別な人ではない、有名人ではない、一般的な人たち）→実は一番ミュージアムに来ない人たちかも。

❷無名・匿名の〇〇さんを巻き込むことが重要。

－そのためには場が必要→みんなが共通して関心あることは何だろう？、食とか？　ごはんを食べる場をつくる？→博物館の目的として何をするか。

❸吉田さん　田中さん、伊藤さん…だれともつながるしくみって出来るのか？

最初は吉田さんだったとして、その次の人は吉田さんが連れてくる、誰かにつながって拡がっていく

❹「抽象的な人（無名・匿名の人）」を集めるためのしくみ

－「今日の吉田さん」毎日代わる代わる近所の人に関わってもらい調査、展示する。

近所の〇〇さんを調査する（ライフヒストリー）というやり方もあるが、近所の〇〇さんと調査するという巻き込み方もあるのではないか。自分がミュージアムを助けているという認識を持ってもらう。

---

▶「のっぺらぼう」（無名・匿名性）の特性を生かす：チーム C「吉田家コレクション展」は、みんぱくの「ソウルスタイル*1」タイプの展示（悉皆的に収集・展示）。チーム B は、それとはタイプが異なる。

▶目的があって収集する展示するのではなく、それが誰にどうつながっていくかが分からない展開をしていくことに意味がある。

－展示：何かを見せる、発信する（目的がある）

－調査研究：つながり、継続性を意識、調査することでつながっていく、つながりができる

▶だれでもない人のライフヒストリーをミュージアムが集積させることの意味

－郷土・民俗博物館のスタンス、「シビックプライド」を醸成する←そう言ってしまうと違うような...

▶人物カードのなかで「近所の吉田さん」は実は一番難しいかも。（吉田さんの）課題や求めているものが何かが見えにくい→そこを見つけていく、その人たちってどういうひとなの？と考えることが大切。実は、一番遠い人、来ない人たちなのかも。

▶チーム C はその人（吉田さん）を掘り下げていった。チーム B は、人物を抽象化していった。

❺匿名性について：「ミュージアムは誰にも開いてます」といいながら関わるのはいつも決まった人たち

－急に開いてもなかなか来ない。特殊性を外していく、重層化させていくことが大切。

－南海ホークス展*2　個人（野球ファン）が所有している資料の展示：家族が毎日観に来る、自分の持っているものが博物館に展示されているのを見たい。

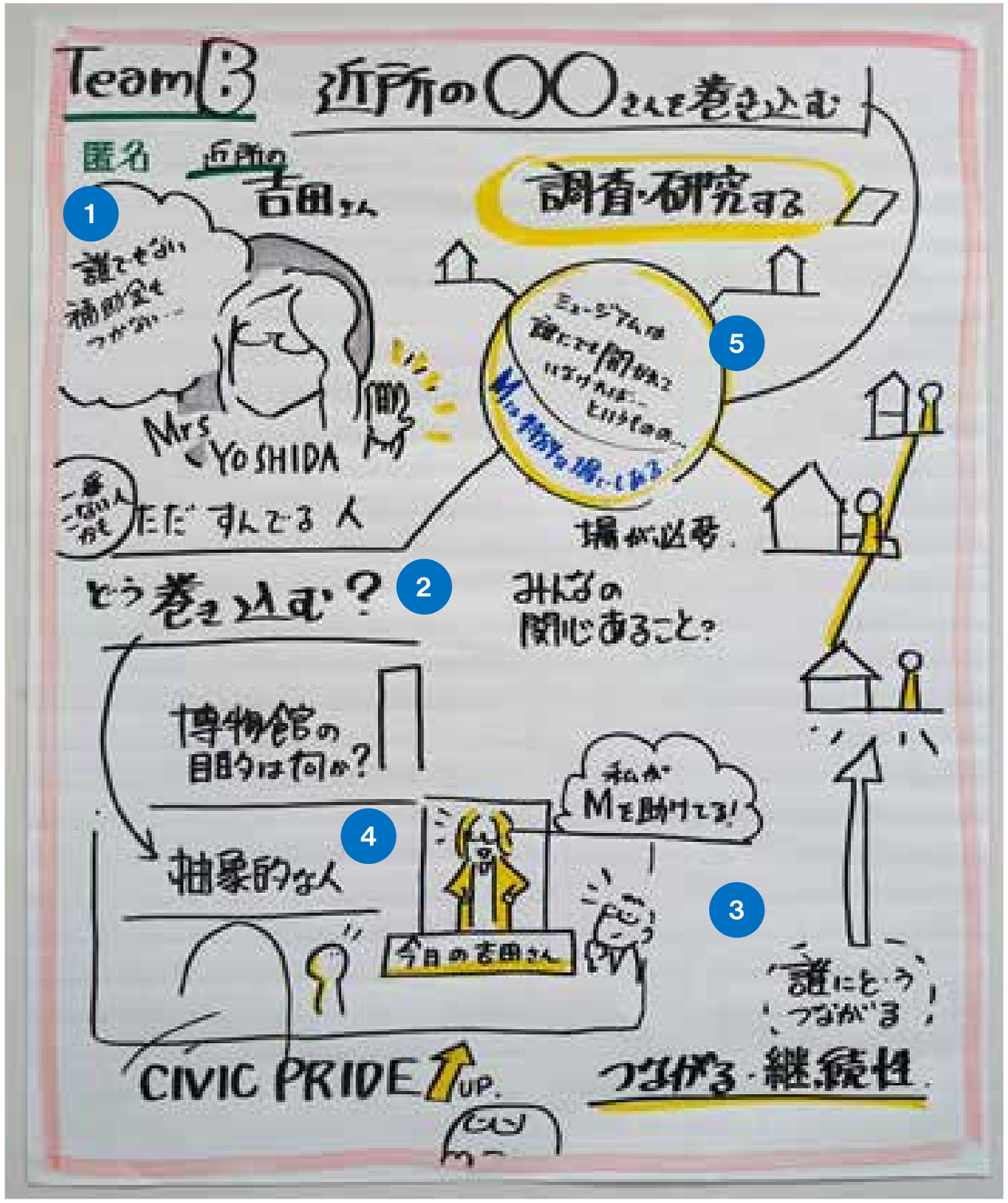
▶ミュージアムは特権的な「特別な場」であり続けている。－自分家でコレクションしても（奥さんに）ゴミだと言われる、博物館だと特別なモノに、自慢できるコトになる。

▶そのなかで匿名性を目指すことは、ある意味交錯的な行為なのかも。

参考：*1「ソウルスタイル」展 http://www.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/special/200203/index

（英）http://www.minpaku.ac.jp/english/museum/exhibition/special/200203/index

*2「南海ホークス」展 http://nagaizemi.cafe.coocan.jp/hawksexhibition2013.htm



## チームＣ：「近所に住む吉田さん」×「展示する」

### “吉田家コレクション展”

❶～：右グラフィックレコーディングの番号に対応

❶吉田さんは、旧家で父母が代々作家（画家）で、地域の記録画を多く描き残している、という設定。
❷何をどこまで展示するか？
－記録画を展示することで、どんな絵を描いていたのか、どういう想いで描かれたのか、作家の人生、子どもたちはどうだったか、どんな服を着ていたのか、どんな時代だったのか…etc.
－館のテーマに従って展示する／コレクションを通じて京都の歴史をたどる展示にする／コレクションというまとまりを大事にする／←吉田家のコレクションを
❸展示をするときの目的は？－教育普及？、それともお金を集める？、万人受け？
❹吉田さんから、自分のコレクションがあるから展示してと言われたらどうするか？
－全部受け入れるとミュージアムの収蔵庫があふれてパンクしてしまう。絞らざるを得ない状況。
－資料の取捨選択、いいのか？館のテーマや対象に合致しないものは、切り捨てるのか？関連する部分をどうするか？歴史はつながっている。
❺何を拾うか・捨てるか、取捨選択、受け入れの基準は？
－館のテーマなのか、学芸員の価値基準なのか、寄贈者の価値基準なのか？？

## ＜ワークショップのようす＞　写　真

## ＜ワークショップ後の感想＞

ワークショップを通して、他館で活動する学芸員であっても、同じような目標をかかげて、同じような課題を持っていることがわかりました。館の性質は違うけれど、課題を解決するために、色々とアイディアを出し合いながら、協力できたら素敵だとおもいました。とくに資料保存や展示叙述の分野は、扱うテーマが異なるほうが、むしろ重層的な考え方や方法論が案出できると思われます。
このように考えると、京都にたくさんのミュージアムがあることが、京都が豊かな都市になっていくためにも、とても重要なんだろうなと考えました。

意見交換等するのに場所も人数もちょうどよかったです。幅広い年齢層や様々な立場から、多くの経験を持った方々が集まり、バランスよく分散して気兼ねなく意見を出し合っておられたので勉強になりました。
今回のワークショップで、グラフィックレコーディングを初めて知りましたが、内容をまとめてくださって大変助かりました。第三者のストレートな視点で要点が整理・可視化されることにより、意見が言いやすく議論が深まった気がします。また、当日参加できなかった方にも一目でわかる上に、親しみやすく、新たに関心を持つ人も増えると思います。
非常に良い刺激になったので、また是非声をかけていただけると嬉しいです。

今回は「京都周辺」という限定的な館を結んでの開催でしたが、それでもあまりにも多くの事例・課題・携わる皆さんの熱い想いを知ることが出来、これほど時間を早く感じたのは久しぶりという約４時間でした。
どうしてもひとつの組織にいると安定は出来るとはいえ、固定的な考えに縛られて広く見渡せないというもどかしさはこの仕事に就いて以来常々感じてきました。こうした交流が広がれば広がるほど、発想と問題解決の糸口は輪に加わる人々それぞれに増えてゆくと思います。どうしても大きな規模で人が集まると議論が固くなりがちですが、今後もこの腹を割って話せる楽しさを維持しながら取り組みを拡大してゆければと願っております。
そしてここで得たアイディアを「実行」することが現場にいる我々の使命であると思います。
そのためにまた日々の業務にしっかりと励もうと思える会でした。

「継承すべきアーカイブとしての地域博物館」
ワーク１のテーマは「地元とのつながり」と「他団体との連携」。現場からの生の声の交換は有意義だった。ICOM 京都大会が市や府も一体となって開催されるのだから、府内各地で活動を重ねてきた地域博物館の諸課題について議論・検討される場は設けられてしかるべきと思っていた。各館は資料を後世に伝える宝庫であり、展示を含む諸活動も地域のあり方を明らかにするアーカイブを構成してきた。しかし、施設は老朽化し、継承の危機を迎えているのが現状だ。まずは地域博物館が「継承すべきアーカイブ」であるという認識について行政を含む多くの府民と共有したい。そして、多くの知見に触れながら、「未来の博物館」について論じていきたい。

**ミュージアムの課題と可能性を考えるワークショップ**

**第１回　ミュージアムに関わる人と活動　レポート**

発　行　2019 年２月

編　集　ICOM 京都大会準備室　　〒605-0931 京都市東山区茶屋町 527

Email: office@icomkyoto2019.kyoto HP: http://icom-kyoto-2019.org/

この冊子の著作権は ICOM 京都大会組織委員会に帰属します（無断転載禁止）

© 2018 ICOM KYOTO 2019 Organising Committee